

平成 23 年度最優秀卒業論文

雑誌『婦人世界』にみる戦前期主婦の余暇

—良妻賢母主義との関係性および労働との混淆に注目した考察—

大前 友紀

Yuki Omae

奈良女子大学大学院人間文化研究科

1. はじめに

余暇研究の系譜において、女性、特に主婦の余暇については、管見のかぎり蓄積が充分とはいえない状況にある。その理由としては、主婦の労働と余暇が混淆した状態にあり、余暇の枠組みが設定しづらいこと、さらには、女性の労働権獲得の労働史的側面に着目した研究が進展する一方で、非労働時間とみなされる余暇はほとんどかえりみられることがなかったことなどが指摘できる。そこで本稿では、女性、特に主婦の余暇がいかなるものであるのか、その実態をあきらかにすることを目的とした。特に、日本において近代化にともない余暇が社会的に創造された第二次世界大戦前（以下、戦前期とする）に注目し、当時の主婦の余暇がどのように創り出されていたのか、そして、家事労働と余暇はどのような関係にあったのかといった点について検討を行った。資料としては、当時の主たる総合婦人雑誌であった『婦人世界』をもちいることとした。

こうした考察を行うにあたり、特に以下の2点に留意した。1点目は、女性の余暇と権力との関係性である。余暇 (leisure) という言葉は「許可される」という意味のラテン語 (licere) に起源を持ち、そもそも、権力と密接に関係する概念である。そのため、女性の余暇についても、権力によって許可されたものの、特に女性のそれとしてジェンダー化されたものとして検討を行うことが求められると考えた。2点目は、女性の余暇と労働との混淆である。余暇は、しばしば労働に対置されるかたちで論じられてきた。そして、その特徴は、時間・空間・意識・活動という4つの視座から見いだされてきた。すなわち、労働と余暇を二項対立的に認識し、労働時間—余暇時間（時間）、労働空間—余暇空間（空間）、苦しみ—楽しみ（意識）、労働—遊び（活動）、のようにとらえられてきたのである。しかしながら、家庭内労働（家事労働）に従事する主婦に注目すると、このような労働—余暇の二項対立的図式は有効に機能しておらず、たがいに混じり合っていると考えた。

2. 雑誌『婦人世界』の位置づけと余暇記事の概要

女性向けの総合雑誌である『婦人世界』は、明治 39 (1906) 年 1 月 1 日から昭和 8 (1933) 年 5 月 1 日まで、およそ 28 年

間にわたり刊行され、計 354 冊の現存が確認できる。当時の多くの雑誌と同様、具体的な発刊部数や売り上げを示すデータは入手できないが、大正の半ば頃までは、『婦人世界』が発行部数 1 位を誇り、それに対抗して『女学世界』と『婦女界』の両誌があり、その他『婦人画報』や『婦人之友』も固定読者をつかんでいたことが確認されている¹⁾。また、前田²⁾や南³⁾の研究によると、『婦人世界』の主たる読者層は年収 800 円以上の中産階級世帯の主婦であったと推定された。『婦人世界』にみられる、主婦の余暇を取り扱った記事の内容は、運動、観光、趣味、団欒に大別できた。これらの余暇記事について概観すると、まず運動については、散歩、卓球、体操、水泳、テニス、スキーなどが認められた。観光に関するものとしては、最も多く記事が見られるのは避暑と、それに伴う海水浴であった。「近頃若い婦人の旅行が流行してきたのは、実に喜ぶべき」と書かれていたように、戦前期の女性も積極的に観光に赴きはじめていたことが確認された。登山もかなり盛んに行われていたことが認められ、主婦による富士登山の感想などが掲載されていた。趣味としては、琴、三味線、謡曲、描画、ピアノ、ヴァイオリンなどが取り上げられていた。なお、団欒に関しては、良妻賢母主義や労働との関係性を以下の第 3 章および 4 章で詳細に確認した。

3. 戦前期主婦の余暇と良妻賢母主義

『婦人世界』の特徴として「良妻賢母主義的雑誌」ということが挙げられる。国家の支配装置でもある良妻賢母主義というイデオロギーの広まりについては、学校教育やメディアが規範として提示する良妻賢母像が人口に膾炙すること、それと同質性を共有したいという欲求が生じること、この二つの心理が同時並行的に進行することによって、良妻賢母主義イデオロギーの内面化が加速したと考えられた。資料とした、『婦人世界』の発行の辞でも、良妻賢母主義の強調が確認できた。

次に、良妻賢母主義イデオロギーがどのように主婦の余暇と関係していたのかについて、『婦人世界』の記事から確認した。ある主婦の言説からは、主婦が「楽しみ」を必要と感じていたことがわかった。しかしながら彼女は、「夫の楽しみ相手」

になり、「自らを楽しませ」、さらには「一家のものの耳を楽しませ」することもできるようになったところに至って、満足を得ていた。すなわち、彼女は余暇の中においても、良妻賢母としての役割を果たし、余暇においてすら家族に奉仕することが彼女の楽しみの礎であったことが読み取れた。この他にも、家族に奉仕することに自らの楽しみを見出している言説や、良妻賢母の「努め」として、夫や子供を楽しませる役割を価値づける言説が確認できた。そして、そのようなイデオロギーにからめとられた主婦たちは、「家族を楽しませる」ことを自らの希求として内面化し、「奉仕する楽しみ」を見出すようになり、家族を楽しませる中で自分も楽しむといった、余暇の行われ方がなされるようになっていったのではないかと推察された。これは、当時の主婦の余暇の特徴的な点のひとつである。余暇とは何らかの権力によって「許可された」状態であるが、主婦の余暇は、労働力としての夫、将来の国民たる子供を産み育てる、良妻賢母としての再生産役割が国家社会の中で意義をもつとして、「許可されて」いたといえる。つまり、主婦の余暇は良妻賢母主義イデオロギーという権力によって、許可されていたといえるのである。

この当時の主婦の余暇のありかたとして、いまひとつ、特徴的なのは、夫の趣味に同化していくという点である。誌上において、夫の趣味にいつの間にか興味を持つようになり、自分もはじめだした、という旨の言説がしばしば語られている。また、夫の趣味に同化しようとする努力に夫が報いてくれたことに、主婦としての幸福を見出していることを語る言説も認められた。こうした言説により、良妻賢母として男性に追従し、余暇ですらも「夫に同化」すれば、幸せになれるといった幻想的イメージが描き出されている。こうした幸福な幻想的イメージとしての良妻賢母を描いた言説がメディアによって流布することにより、良妻賢母主義イデオロギーが彼女たちのアイデンティティに内面化される際に、想定されるのは抑圧された良妻賢母像ではなく、幸福な良妻賢母像となる。これが、支配や抑圧を自覚することなく良妻賢母主義イデオロギーに組み込まれるといった、この時代に特有の良妻賢母主義的な主婦の余暇の社会的創造において、『婦人世界』というメディアが果たした役割であると考えられる。

4. 戦前期主婦の余暇と労働の関係性

本章では、戦前期における主婦の余暇が、家事とどのように混ざり合っていたのかという点について、特に家庭の内と外という空間的な差違に注目しながらその状況について考察した。

まず、家庭内において、主婦は、家事労働も余暇も、家という同一の空間において行っていたことがわかった。団欒や家事行為の中に楽しみを見出すケースや、行為の結果が家族の喜びや称賛を期待し得る場合に家事に楽しみが見出されていたケースなどが確認できた。

次に、家庭外においては、当時の主婦たちも、観光のような空間的な移動をとまなう余暇活動を行っていたことが読み取れた。アーリ (Urry, J.)⁴⁾ は、観光とは日常から離れた異なる景色、風景、町並みなどにたいしてまなざしを投げかけることであるとしている。そして、そうしたまなざしを向けられる場所は通常、賃労働とも無報酬の労働とも明確に対比された場所であるという。誌上からは、当時の主婦が、非日常の風物にアーリのいうような観光客のまなざしを投げかけていることが読み取れた。

しかしながら、当時、こうした避暑に出かけた際には「自炊」で食事をまかなわねばならず、こうした「自炊」は主婦の手によって行われていた。すなわち、家という空間に囲い込まれていた主婦が、家から避暑地へと、空間的には移動しても、家庭において課せられていた役割、すなわち、料理をはじめとする家事労働を取り仕切るという役割から解放されることはなかったのである。こうしたことから、当時の主婦の余暇は、時間・空間・意識・活動が混雑した複雑な状態にあったことがわかった。

5. おわりに

本稿の限界としては、『婦人世界』というひとつの雑誌を資料として戦前期主婦の余暇を描き出そうとしたことや、戦前期主婦の余暇というかなり狭い対象を設定したことなどがある。そのため、本稿では検討を加えることができなかった分析対象や資料にも視野を広げた余暇研究を行うことにより、余暇という事象・概念に対する理解をより深めることが必要だと考えられる。こうした点を今後の検討課題としたい。

【注】

- 1) 永嶺重敏『雑誌と読者の近代』日本エディタースクール出版部、1997、183頁。
- 2) 前田愛『近代読者の成立』岩波書店、2001、217頁。
- 3) 南博『大正文化』勁草書房、1965、183-185頁。
- 4) ジョン・アーリ (加太宏邦訳)『観光のまなざし—現代社会におけるレジャーと旅行』法政大学出版局、1995。